

— 資 料 —

子育て支援に向けての保育者養成校と保育園の連携
—「きずな DAY」の事例より—

川村高弘・廣田周子・桐原美恵子・庄司圭子・水島賢太郎
塚田みちる・永井久美子・長谷川美和・畠山由佳子

The Direction of Childcare Support of The Cooperation of The Early Childhood
Care and Education Course of A College and The Nursery Schools
—A Case Study in “Kizuna-day” —

Takahiro KAWAMURA Chikako HIROTA Mieko KIRIHARA Keiko SHOJI
Kentaro MIZUSIMA Michiru TSUKADA Kumiko NAGAI
Miwa HASEGAWA Yukako HATAKEYAMA

要 旨

2011年4月に設立された神女中山手保育園と保育士養成校である神戸女子短期大学幼児教育学科は、同保育園設立時より保育園の理念と養成校教育の改善に向けて連携を深めてきた。その一つに両組織が共同で行う「きずな DAY」という行事がある。この行事は、保育園設立の翌年(2012)より4年間に亘って毎年12月に行われた結果、保育現場と保育士養成の課題を連携しながら考えるための前提となるラボールの基盤が形成されてきた。本報告は、この基盤をもとに、より質の高い保育と子育て支援および保育士養成教育を展開するため、これまでの「きずな DAY」の内容やねらいを事例の資料とまとめ、この実践過程で見えてきた保育施設と保育士養成校の課題について述べたものである。なお今回の事例には、第4回目(2015年12月)については日程の関係で資料には含めていない。

I. はじめに

学校法人行吉学園神戸女子短期大学幼児教育学科(以下、幼児教育学科)は、1955年に神戸女子短期大学に設置された神戸女子短期大学初等教育学科の歴史を踏まえて、2009年に設置された。一方、神女中山手保育園は、神戸女子大学・神戸女子短期大学を運営する学校法人行吉学園の寄附により設立された社会福祉法人神女きずな会が運営する保育園として、2011年4月に設立された。

神女中山手保育園(以下、保育園)の保育理念の項目として、「愛情あふれる保育」「健やかな成長を支える保育」とともに「大学、短期大学との連携」「子育て支援」があげられている。このうち「子育て支援」に関しては、2008年3月の厚生労働省告示第141号で示された保育所保育指針の第6章1(7)にある「地域の子育て支援に関する資源を積極的に活用するとともに

に、子育て支援に関する地域の関係機関、団体等との連携及び協力を図ること」と符合している。

さて、言うまでもなく保育士養成校である幼児教育学科のミッションは有能な保育士養成である。そこで、保育園の理念と保育者養成校のミッションの双方にとって意義ある連携のあり方を具体化するための議論が、保育園開設後の園運営確立期の1年を待った2012年4月から行われた。その中で、地域支援を含めた行事を行うということが決まった。

そして、行事の具体化にあたっては、保育園の理念に「大学、短期大学との連携」があるように、連携を息長く続かせるために、行事内容は両組織の日常業務に負担を伴わないものとした。そこで、始める行事を、数年は骨格を変えなく済むものとして設計した。そして、学生の関わり方もボランティアで参加ということにし、同年12月に現在まで続く「きずなDAY」の1回目が実行された。

次に示すのは、その会議で了解された「きずなDAY」の理念である。

「きずなDAY」の理念

- (1) 大学が持つ保育士に関する「知」と保育士養成教育の成果物を保護者や地域の方々に交流を通して公開し、保育現場での実践の背景にある保育の理論や保育士養成教育がどのようになされるかを知ってもらう。
- (2) 保育実習では、子どもや職員との交流経験に比べ、保護者や地域との関わりは少ない。これを補う場を設定し、保育者を目指す学生の実践力向上を図る。
- (3) 神戸女子短期大学と神女中山手保育園の間に、強いきずな(=ラポールの基盤)を確立する。

次節では、上記の理念が企画内容をもとに2012年12月から2015年12月まで4回に亘って実施された「きずなDAY」のうち、資料整理の終わっている第1回目から第3回目の内容を紹介する。なお、設営は「きずなDAY」前日に関係教員、学生ボランティアおよび保育園職員代表で行った。

II. 「きずなDAY」の実践記録

1. 「きずなDAY」の概要

「きずなDAY」は、神戸市中央区中山手通にある神戸女子大学教育センター(以後、教育センター)と保育園を使用し行ってきた。ここでは、「きずなDAY」の具体的なプログラム内容について年度別に整理していく。

(1) 第1回きずなDAY(平成24年度)

実施日時：2012年12月8日(土) 10:00~12:00

<保育園でのイベント>

- ・学生による劇上演(学生10名)「ともだちほしいな おおかみくん」10:00~
- ・造形・絵画作品展示 10:00~
造形表現の教材研究作品

「はじめて作るフェルトボール」, 「名前からオブジェ」, 「スクラッチで描く私の手」
「かっこいいのりもの」, 「木で作るおもちゃ」, 「やさいのせなか〜ランチョンマット〜」
<神戸女子大学教育センターでのイベント>

- ・「おおきくなったよ」(保護者42名参加) 10:00~
- ・保育教材・展示実演 10:00~
- ・ミニ講座(保護者, 地域の方合計69名参加) 11:00~
テーマ「絵本と子育て」(高瀬陽子准教授), 「3歳児神話をめぐって」(塚田みちる准教授)
- ・預かり保育室開設(託児担当学生25名, 利用した子ども→14名) 10:30~

(2) 第2回きずな DAY (平成25年度)

○実施日時: 2013年12月14日(土) 10:00~12:00

<保育園でのイベント>

- ・学生による劇上演(学生30名) 10:00~ 「ふしぎの国のアリス」
- ・造形・絵画作品展示
「絵の具で遊ぶ・変化していくことを楽しむ」10:00~

<神戸女子大学教育センターでのイベント>

- ・「おおきくなったよ」(保護者42名参加) 10:00~
- ・保育教材・展示実演 10:00~
- ・ピアノ演奏会(学生6名) I部 10:15~ II部 11:15~
- ・預かり保育室開設(担当学生23名, 利用した子ども→15名) 10:30~

(3) 第3回きずな DAY (平成26年度)

○日時: 2014年12月13日(土) 9:30~12:00

<保育園でのイベント>

- ・学生による劇上演(学生29名) 10:00~ 「おむすびころりん」
- ・造形・絵画作品展示
「絵の具で遊ぶ・変化していくことを楽しむ」9:30~

<神戸女子大学教育センターでのイベント>

- ・「おおきくなったよ」(0歳児保護者8名, 1歳児保護者31名参加) 10:00~
※これまで, 0歳児と1歳児の保護者合同で行っていたが, 今回は別々の教室で実施。
- ・保育教材・展示実演 9:30~
- ・ミニ講座(保護者14名参加) 10:00~
テーマ「子育てで支援のあり方をめぐって~ニュージーランドの教育・子育てとの比較から見た私たちの子育て~」(塚田みちる准教授)
- ・ピアノ演奏会(学生6名) 11:15~
- ・預かり保育室開設(担当学生19名, 利用した子ども→18名) 10:30~

2. 「きずな DAY」の実践内容の詳細とねらい

ここでは, これまでの「きずな DAY」の具体的な内容についてイベントごとに整理していく。

(1) 学生による劇上演

毎年、学生は11月に行われる学園祭において、「幼教パフォーマンス」という幼児教育学科の学生がクラスごとに子ども向けの劇やオペレッタを発表している。その中で、神女中山手保育園の園児や地域の親子たちの前で発表する上で最も適していると思われる2年生のクラスに、「きずな DAY 賞」(幼児教育学科教員全員で選考)が贈られ、そのクラスが、きずな DAY 当日に上演することとなる。「きずな DAY」当日の劇は、幼教パフォーマンスの再演ではなく、保育園の子どもに見せるに相応しいアレンジが求められている。保育者を目指す学生にとって劇を発表することは、表現技術を磨くことのできる貴重な機会となっている。



写真1 劇上演の様子①(第2回より)



写真2 劇上演の様子②(第3回より)

(2) 造形・絵画作品展示

展示される作品は、「きずな DAY」のために作成されものではなく、8月の夏の日に関係する学科特別演習Ⅰ・Ⅱという授業の一環として長谷川美和ゼミの学生が子どもたちと共に保育園で保育実践として取り組んだ成果物の紹介となっている。この実践のねらいは、次の通りである。

自分の体よりも大きな画面に描くということは、人間の身体の構造上からも非日常的な体の動きと感覚を体験することとなる。

全紙サイズの用紙に向かって、刷毛や大きな筆を用いて、絵具で描いてみた。最初のきっかけは、「たくさん点々を打ってみよう」である。子どもたちは、思い思いに画材を選び、最初は控えめに、あるいは恐る恐る、大きな画面に点々を打っていく。やがてその小さな点々が重なり、点々だけではなく、流れる線や、塗りこめられた抽象的な形の面となって塗り重なり、にぎやかな画面へと変化していく。子どもたちは、用紙が破れてもかまわず何色も塗り重ねて、絵具まみれになっていく。絵具がほとぼしり、重なり、混ざって、どんどん変化していく楽しさや美しさ。この制作過程こそが、まさに作品である。

暑い8月の夏の日に関係する保育園にて子どもたちが学生と共に感性豊かに取り組んだこれらの絵具遊び作品を、きずな DAY 当日、保育園ホールに展示し、鑑賞を楽しんだ。



写真3 制作している子どもの様子(第2回より)



写真4 作品展示の様子(第3回より)

(3) 保育教材の展示・実演

1) 手作り教材の研究作品

手作りの教材は、子どもたちの心を惹きつける。学生は、その手作り教材を作り、子どもの前で実演するという活動を通して、子ども理解を深め、自身の表現力を身につけていく。幼児教育学科2年次生が、庄司圭子ゼミ「学科特別演習Ⅰ」および「保育内容の指導法B」の授業で制作した作品を展示した。実践のねらいは次のとおりである。

子どもの反応を想像しながら題材を決め、エプロンや手袋の色を選び、部品の形、色、表情においても、伝えたいことが子どもに伝わるだろうか?などと試行錯誤する。その過程を通して、表現の面白さに気づき、楽しさも感じるようになる。そうしてできた愛着ある教材を使って子どもの前で実演し、子どもの笑顔を見ると、その達成感は充実した喜びとなる。保育者になろうという意欲を高めるには、このような「子どもたちに心が伝わる」という経験の積み重ねが必要なのである。学生たちは、そのようにして「保育の心」を感じ取っていくのである。



写真5 エプロンシアター(第2回より)



写真6 手袋シアター(第3回より)

2) 観察記録

幼児教育学科1年次「保育内容の指導法(環境)」, 2年次「保育内容の指導法B」の授業において、学生は、月の満ち欠け・町の人の様子・身近な自然の様子・新聞記事から感じたことについての観察記録を週1回つけていった。表紙には、カードや絵本等によく活用する「飛び出し仕掛け」を取り入れている。この実践のねらいは次のとおりである。

保育者は、心を外に向けることが必要である。子どもをよく見る、友達の間を見てとらえる、保護者の様子や表情を瞬時に感じ取る、教師間の関係をよくするなどである。子どもたちの様子や周りの環境、身近な自然の様子をいち早く見て感じ取り、また深く観察することで、「保育の芽」を見つけるのである。保育者の資質として、周りをよく見て気を配るということを習慣付けていくことが大切である。

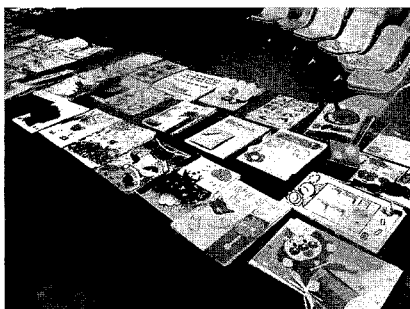


写真7 観察記録（第2回より）



写真8 観察記録（第3回より）

3) 乳幼児の遊びと環境構成

学生が「乳児保育Ⅰ」で制作した手作りおもちゃを展示した。そして、見学に来た保護者や地域の人に、保育環境としておもちゃが持つ意味を説明し、また、一般の人になじみの薄い環境構成の意味をポスター資料で示すなどして説明した。ポスターに示した環境構成の概要を次に示す。

保育者の役割は、子どもに何かを教えて教育するというのではない。子どもが自ら喜びを生み出せるように支援し、生涯幸せに生きる力の獲得を助けることが、重要な役割である。

1歳頃のもの投げの行為に関していえば、「ものを投げてはダメ」というだけでなく、保育者として子どもの姿を「腕や足が発達してきているために粗大な動きを欲している」と捉えることもできる。子どもは身近な環境に自らかかわり、発見を楽しんだり考えたりしながら、それを生活に取り入れようとする。こうした子どもの姿をよくみて、支援のための適切な環境を作ることにこそ、保育者の専門性が試される。保育は、子どもの生活や遊びを通して、その内容が互に関連しながら総合的に展開されるものである。そのために、身体運動の発達を豊かに展開し得る保育の長期的・短期的な保育計画が必要となる。

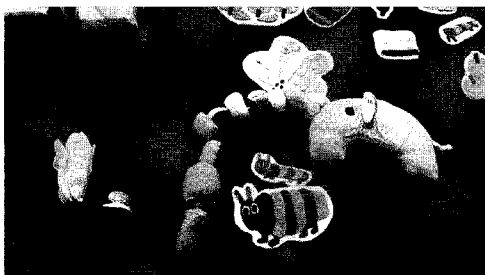


写真9 おもちゃ①（第3回より）

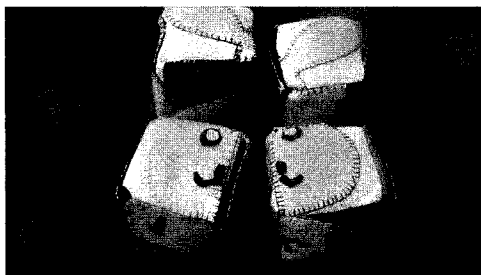


写真10 おもちゃ②（第3回より）

(4) ピアノ演奏会

通常、保育園での保育は保護者が就業している間の預かりが主目的となっている。しかし、保護者支援の観点からいえば、大人の時間を持つゆとりがもたらす効果は大きい。これが「きずな DAY」の内容にピアノコンサートを入れるようになった理由の一つである。次にもう一つの理由である保育者養成の一環としてのねらいを示す。

学科特別演習の廣田周子ゼミではピアノ演奏を通して「自ら表現する」ことをめざしている。学生は4月から12月まで1つの課題曲に取り組むことで、自ら自己の技術的問題点を発見し、改善・向上すると同時に、丁寧な楽譜の読み込み、楽曲理解等を学ぶ。そこから彼らは作曲者の意図を汲み取り、楽曲を通して「自分の音楽」を「表現する」ことに挑戦している。「きずな DAY」では多くの聴衆の前で演奏することで、自身の高揚感、緊張感をコントロールしつつも、人前で表現する臨場感を体験している。学生にとって、このように「会場の共感を得る体験」をすることで、保育現場の音楽が、単なるツールではなく、子どもの感性を育む重要な体験であることを考えるきっかけとなる。

<第2回きずなDAYプログラム>

I部		II部	
1 【連弾】ディアベリ	ソナチネ へ長調 Op. 24-1	1 【連弾】モーツァルト	ソナタ 変ロ長調 k. v. 358 第1楽章
2 パッハ	イタリア協奏曲 1楽章	2 グリーグ	小人の行進 Op. 54-3 「叙情小曲集」より
3 カバレフスキー	ロンド・マーチ Op. 60-1	3 メンデルスゾーン	胸騒ぎ Op. 53-3 「無言歌集」より
4 シューマン	蝶々 Op. 2	4 シューベルト	即興曲 Op. 142-3
5 【連弾】ビゼー	コマ回し・小さな旦那様、小さな奥様 Op. 22 「子どもの遊び」より	5 【連弾】ビゼー	コマ回し・小さな旦那様、小さな奥様 Op. 22 「子どもの遊び」より

<第3回きずなDAYプログラム>

1 モーツァルト	ソナタ へ長調 作品332 第1楽章
2 ディアベリ	ソナチネ 卜長調 作品151-1
3 ラベル	水の戯れ
4 ベートーベン	ソナチネ へ長調
5 ショパン	ワルツ 変ホ長調 作品18
6 ブラームス	ラプソディー 作品79-2
7 【連弾】チャイコフスキー	花のワルツ 組曲「くるみ割り人形」より

(5) 子育てに関するミニ講座

保育に関わる話題を、大学からの知の発信として行った。

<第1回きずな DAY>

- ・「絵本と子育て」 担当：高瀬 陽子 准教授
- ・「3歳児神話をめぐって」 担当：塚田みちる 准教授

<第3回きずな DAY>

- ・「子育て支援のあり方をめぐって～ニュージーランドの教育・子育てとの比較から見た私たちの子育て～」担当：塚田みちる 准教授

(6) 「おおきくなったよ」(0, 1歳児の保護者対象の保育園行事)

(1)から(4)は幼児教育学科が担当した行事であるが、「大きくなったよ」は生活発表会のような保育園の行事として実施された。このため、以下の実践報告は「きずな DAY」学科内部資料から、保育園・永井美佳主任による記録を紹介する。

保育園では、0, 1歳児はまだまだ一人ひとりの生活リズムや個々の遊びを大切にしたいとの思いから、運動会や発表会など集団で一斉に活動する行事には参加しない方針をとっている。そして、それにかわる行事として「保育参観(6月)」と「おおきくなったよ(12月)」を開催

した。子どもの成長をともに喜び合える機会を設けている。また、「おおきくなったよ」を「きずな DAY」と同時開催することによって、神戸女子短期大学と保育園が連携していること、また、保育者を目指して学ぶ学生の姿を直に感じとっていただける機会を作ることをに重きを置いている。

ビデオは保育園での一日の生活を映像で追いながら、一人ひとりが伸び伸びと遊び、生活する様子や、また、成長して友だちと遊ぶようになった姿を見ていただいた。

第3回は、0歳児、1歳児別の部屋を設定し、映像での鑑賞会と保護者懇談会をそれぞれ行った。

(7) 地域の親子向け「預かり保育」について 保育園と幼児教育学科の共同運営

「きずな DAY」参加の地域の親子は保育園の多目的ホールで遊んだり、預かり保育担当学生と一緒に園内を見学したり、和やかなひとときを過ごした後に学生上演の劇を鑑賞する。その後、親が子どもと離れて行事に参加できるよう教育センター4階に預かり保育室を開設し、保育がスタートする。次に示すのは、保育園保育士の目から見た学生の様子で、(6)同様、保育園・永井美佳主任による記録に同じくある。

子どもと学生さんは1対1で過ごすので、きめ細やかで丁寧な関わりが出来る。学生は言葉以外にも、身振りや表情で表現する子どもの欲求を感知しようと懸命である。ひたむきに、そして誠実に子どもと向き合う気持ちが伝わるのであろうか。保育士では容易にこのような状況にはならない、子どもは安心感と信頼感を得ているようである。

Ⅲ. まとめと課題

今回は「きずな DAY」の実施内容を記録的な意味での資料として示したが、保護者や地域の方および学生にアンケートを行っている。アンケートの分析と考察に関しては、紙幅の関係もあり別の機会とするが、およそ次のようなことがうかがえる。

保護者や地域の方の結果

預かり保育を利用し、劇や手作り作品、エプロンシアターや手袋シアターの実演、ピアノ発表会等を楽しんでいる様子がうかがえる。また、普段目にしない保育者養成の様子や保育者が身につけているスキルを知っていただくというねらいは理解されているようである。

参加学生の結果

保育実習を経験している学生は子どもや職員とのコミュニケーションの機会はあるが、保護者と触れ合う機会は少なく、登園等での挨拶程度に留まることが多い。このため、大学の授業で知識として学んだ子育て支援の重要性を保護者との触れ合いを通して実感し、子育て支援の重要性を感じたとするものが少なくなかった。

保育所保育指針解説（2008）には、保育所における保護者支援の特長について次のように大きく二つあると記されている。一つは「入所している子どもの保護者に対する支援」であり、もう一つは「保育所を利用していない子育て家庭も含めた地域における子育て支援」である。このように、園児の保護者に対する子育て支援以外にも、地域に対する子育て支援が重視される。しかし、現状では単位化された「保育実習」に相当するような子育て支援の「実習」は養成課程の中に組み込まれていない。この意味で、学生が保護者や地域の子育て世代と触れ合う「きずな DAY」の経験は今後の保育者養成を考える上で重要なヒントを与えてくれたため、学生のボランティア参加から一歩踏み込んで授業の一形態として取り入れることも課題となっている。実際、4回の「きずな DAY」を行う内に、単位科目の学科特別演習（ゼミ）として「きずな DAY」当日やそれ以外の日でも保育園と交流体験が始まるといった成果も出てきている。「きずな DAY」の4年間によって、神戸女子短期大学と神女中山手保育園のラポールな関係の基盤が出来たので、この「きずな」をより一層深めるとともに、学生がより一層深く保護者や地域の方々と交流を深めるための企画を学生も交えて考えていくところが次のステップへの課題である。

引用・参考文献

- 厚生労働省（2008）. 保育所保育指針.
厚生労働省（2008）. 保育所保育指針解説. フレーベル館.
田頭伸子・宮田保江（2009）. 広島文化学園短期大学紀要(42), pp.51-58.
文部科学省（2008）. 幼稚園教育要領解説. フレーベル館.

謝 辞

今回の学科行事である「きずな DAY」の事例報告を行うにあたり、保育園の園長山中ます子先生、主任保育士の永井美佳先生ほか、協力いただいた神女中山手保育園および教育センターの皆様方に心より感謝申し上げます。また、過去において「きずな DAY」の企画や運営に当たった退職教員の羽多悦子元学科長、高瀬陽子、三木さち子、宮内真知子の各先生にも感謝申し上げます。